沖縄の歴史と魅力（上）

年の瀬での思い

毎年12月を迎えると、この一年を振り返り、新年を迎える。ビジネスの世界では、四半期決算での点検や確認が、短い期間で行われる。

一般の暮らしでは、一年間の区切りのほか、小・中・高校などの入学から卒業までという年数が区切りともなる。子供自身も自分の中学生時代などとらえるが、親の方がそれに合わせ暮らす。大学生ともなれば、それは本人の生き様の方が左右する。

さて政治の世界では、任期が重要で、次の選挙が気になる。こうして政治が行われのであるが、その間に戦争の惨禍を引き起こすこともある。ウクライナ・ロシア戦争は年末でも継続し、別にイスラエルとガザの戦争も始まった。どうやら新年を、戦禍のニュースで迎えることになりそうである。

沖縄訪問

日本も80年前は戦時中であった。とりわけ沖縄は実戦場としての歴史を経て、1945年に終戦を迎えた。戦後、沖縄は米国の統治下にあった。そして27年後の72年、やっと本土復帰した。

その翌年、73年の夏、筆者は沖縄に行った。日本機械学会関西学生会が企画した沖縄への洋上大学に関東の学生であったが参加した。神戸港から那覇港までのフェリーで往復、その船上で講義、島内を見学し慰霊も行った。今回、それを話題にするのは強いインプレッションと大きなエフェクトを与えられたからである。阪大の大路清嗣教授の「金属の疲れ」という船上講義が、筆者のその後の研究生活や研究テーマを決めるきっかけとなった。

本土復帰から50年目にあたる昨年2022年、ちょうど今ごろの12月に、日本機械学会の講演会が那覇（琉球大学）であり、6日間滞在した。学会の講演会当日は雨であったがそれ以外は晴天で、いろいろ見学もした。そして、沖縄らしい発見、本コラムの「地元力発見！」をした。

購入した「かりゆしウェア」の専門店

翌日の学会講演会は雨模様であったので、長袖を着てプレゼンした。私のプレゼンは「未来史解題」というテーマで、未来に向かって現在活動すべきことを後輩の研究者たちに語った。蛇足ではあるが、今回の学会では地元の高校生が科学技術の担い手としてポスター発表していたので、いろいろ質問して意欲喚起を図った。

博物館展示

本土復帰50周年を記念し《沖縄県立博物館・美術館》では地元の写真家・平良孝七展を開催していた。平良は、本土復帰の前後を中心に沖縄を記録した写真家であり、22年11月から23年1月まで展示された。沖縄の当時の現実をあぶりだした。

平良孝七展のポスター（2022年12月）

県庁前駅にあるデパートの入るビルの4階には《那覇市歴史博物館》がある。常設展示として琉球の歴史を展示紹介している。昨年の特別展示は琉球織物の発展と変革であった。沖縄の有名な紅型も本土との関係により、また手作業から機械化が進み、ある面で衰退した。結果、日常使いから観光向けに変容したのであるが、地元ならではの手づくり伝統工芸品「琉球びんがた」のブランド品として継承している。（次号に続く）

佐藤建吉　「洸楓座」代表

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。

地元力発見！ ⑤⓪

鐵の道

沖縄にはこれまで3、4回は訪ねている。今回の沖縄での移動は、空港からホテル、ホテルから目的地までは、モノレール、バス、タクシー、また遠出にはレンタカーも利用した。とりわけ那覇市内はモノレールの「ゆいレール」を多用した。

沖縄では唯一の鉄道であるモノレール「ゆいレール」

それは、本コラムの下段にあるように、筆者は「鐵の道」という地酒をプロデュースしており、沖縄では泡盛の「ゆいレール応援酒・鐵の道」を企画中である。この企画に関わる沖縄訪問は今回が2回目で、沖縄県酒造協同組合、ゆいレール本社、さらに沖縄県庁にも相談に出かけた。しかし、泡盛の「鐵の道」は、いろいろの条件や現地事情で、まだ商品化には至っていない。地元の有力者の力添えが必要な状況にある。

かりゆしウェア

那覇市のメインストリートの国際通りには、土産物ショップ、レストランや居酒屋などが並んでいる。その通りの専門店で、玉城知事がいつも着用している「かりゆし